

今昔物語の中のキノコたち

薬学部講師 川木 秀子

1 はじめに

今昔物語31巻は12世紀ごろ成立した日本最大の説話文学集で、編者は宇治大納言隆国であるといわれ、天竺、震旦、本朝の3部に分かれている。しかし、おおかたのひとは芥川龍之介の「鼻」、「芋粥」などの小説によって、よく知るようになったものと思われる。その芥川龍之介に「今昔物語に就いて」という短い文章があって、主として本朝の部の面白さを強調している。

「この生なましきは、本朝の部には一層野蛮に輝いている。

一層野蛮に？

僕はやっと今昔物語の本来の面目を発見した。今昔物語の芸術的生命は生なましきだけには終わっていない。それは紅毛人の言葉を借りれば、brutality（野生）の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。中略 今昔物語の作者は事実を写すのに少しも手加減を加えていない。これは僕等人間の心理を写すのにも同じことである。尤も今昔物語の中の人物は、あらゆる伝説の中の人物のように複雑な心理の持ち主ではない。彼等の心理は陰影の乏しい原色ばかり並べている。しかし今日の僕等の心理にも如何に彼等の心理の中に響き合う色を持っているであろう。銀座は勿論朱雀大路ではない。が、モダン・ポオイやモダン・ガアルも彼等の魂を覗いて見れば、退屈にもやはり今昔物語の中の青侍や青女房と同じことである。以下略」

おそれもなく付け加えるとすれば、編者

大納言の科学者のような語（かたり）である。客観的に観察した、無駄のない、しかも必要なことはすべて記述されている、現在でも我々が参考にできる文体である。

さて、今昔物語の本朝世俗部に、いくつかキノコに酔う話がある。このようなキノコの記載は、この物語が最古のものであるとされている。この第28巻、本朝世俗部、舞茸縁起にある、舞茸、笑茸の内容について考えてみたい。

2 舞茸縁起

尼ども山に入り、茸を食ひて舞ひし話 第28
この話を要約すると

「尼僧たちが京都の北山へ花を摘みに行き、道に迷い、その内お腹がすいたので、そこらに生えているキノコを焼いて食べたところ、恍惚として歌い踊りだしたので、このキノコは食べると、踊り狂うということで、舞茸と呼ばれた」

と言う縁起談である。

後日談として、

「舞茸キノコを食べても誰も踊らなかった」とあることから、尼僧たちの食べたキノコは今、我々が言うところのマイタケではないことがわかる。現在でも、マイタケは食茸であり、秋になるとスーパーにパックづめで売られている。それを食べて幻覚が起こった、と言う話も聞かないから、このキノコはマイタケとは別のものであろう。



図1 マイタケ



図2 ワライダケ

では、このキノコは何か？
 牧野新日本植物図鑑によると、
 「これは笑茸であろう」
 と記されている。ところがAERA¹⁾には
 「このキノコはベニテングダケであること
 が分かっている」
 と記されている。

図2からでもわかるように、ワライダケは
 動物の糞の上に生えるキノコで見たところ、
 あまり美味しそうにない。したがって、今昔
 物語のキノコはベニテングダケと考えるのが
 妥当であろう。

今昔物語にはこのほか

「金峯山の別当になりたくて、平茸に似て
 いる毒茸を食べさせて失敗するナンバー2
 の僧の話」

など、今にも通ずる話があり、興味のある方
 は今昔物語をひもといていただきたい。装飾
 過剰な現在から見れば、その簡潔な文体に新
 鮮な魅力を感じるであろう。

3 幻覚キノコのいろいろ

幻覚をおこす植物は広く世界中に分布し、
 主に呪術宗教的に使用されている²⁾。例え
 ば、幻覚キノコはメキシコ・インディアン、
 シベリアなどで



図3 ベニテングダケ

「神との交信」
 のために、シャーマンが食したものである。
 メキシコ・インディアンはこれらのキノコ
 (*Psilocybe mexicana*) を治療に用いたわ
 けではないが、重大な問題に直面した時、こ
 れらのキノコに相談をした。

例えば、誰かが病気になる、キノコは
 「どうして病気になったか、病人は生きる
 か死ぬか」
 を告げてくれる。

死ぬとでると、病人と家族はあきらめてしま
 い、そして病人は食欲を失い、まもなく息絶
 える。

これとはまったく別に、北欧のバイキング

は戦闘に備えて、この種のキノコ（ベニテングダケあるいはワライダケであろうといわれている）を食べたといわれる。彼等はこれを食べることにより野獣のように勇敢になり、出会った者を誰彼のみさかいかなく片端から斬り殺した。あの伝説的なパイキングの勇猛さが、幻覚キノコを抜きには考えられない⁸⁾、というのは愉快ではないか。

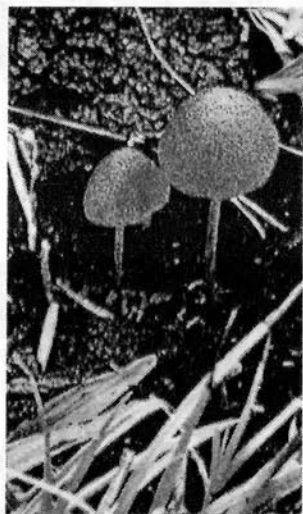


図4 シビレタケの一種
(*Psilocybe mexicana*)

一方、日本では密教的に護摩焚きがあり、芥子や胡麻などを用いる習慣があったが、上記のような幻覚キノコを宗教的に使用した記録はない。しかし、今昔物語、幻覚キノコと尼僧が結び付いて記されていることから、まったくなかったといえるであろうか。今後の研究に期待したい。

今昔物語には、これらのキノコを食べたときに起こる状態について、簡単な記述しかない。この現象を再現してみたいと思う。まず「幻覚キノコを食べるとどんな状態になるか？」

についてAERA¹⁾によると、民族薬理学者、故石川元助氏が65年にメキシコ先住民の「聖なる茸の祭典」に参加した時の様子を記載しているので、それを引用する。

「私は完全に意識を失い、色彩だけのあの世へ行った。金、銀、赤、オレンジ、ブルー、緑、黒など美しい7色が渦を巻いていたり、滝のように流れたりした」

このように視覚的色彩的な幻覚が現れるのは、LSDを服用した時と非常に似た現象であるように思う。もちろん、今昔物語には、色彩的にも幻覚が現れたという表現はない。しかし、キノコが特定でき、その毒成分が解明されていることから、幻覚が現れると考えるのが自然であろう。尼僧たちは、幸運にも現在の芸術家が創造性のために、LSDを服用したように、色彩と音楽の世界に入り込んでいったのであろう。しかしながら、食べるキノコの量によって、いつも、天国へ行けると決まったものではなく、時には地獄へ落ちることがあるために、乱用されなかったのではないだろうか。

4 幻覚物質は何か

キノコの毒性は摂取量により決まる。それ故、同じ量を食べても、キノコの生える時期および場所によって、幻覚だけですむか、致死に至るかわからない。

日本産の幻覚性キノコには成分および作用の視点から大きく2つの系統がある。

- (1)ベニテングダケ (*Amanita muscaria*) やテングダケ (*Amanita pantherina*) に代表されるもの。

この成分はテングダケ属に広く分布している、イボテン酸であるとされている⁴⁾。このイボテン酸は不安定な化合物で、脱炭酸してムスシモールに変化する。

イボテン酸は中枢神経の興奮性アミノ酸の一種で、アスパラギン酸の拮抗物質（構造が似ているので競合する）であり、ムスシモールは中枢神経の抑制伝達物質γ-アミノブチル酸 (GABA) の拮抗物質であることがわかっている (図5)。

イボテン酸は脳関門を通過できないが、経口ではムスシモールになって吸収され、

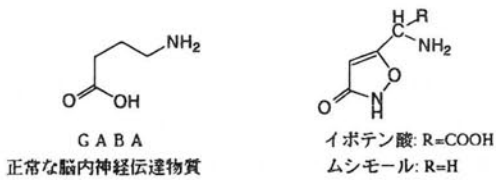


図5 ベニテングダケなど

GABAの拮抗物質として作用する。現在では、これらの関連物質が合成され、脳の生理の研究に役だっている。なお、ムシモールを摂取して、幻覚を経験したという報告⁴⁾もあることから、テングダケなどの幻覚成分はムシモールであると考えられる。

R.G. Wassonによると、インドの聖典リグヴェータの中で、ソーマと呼ばれて讃えられている植物は、ベニテングダケであるという⁵⁾。

(2)ヒカゲシビレタケ (*Psilocybe argenti-pes*)、ワライタケ (*Panaeolus papilionaceus*) に代表されるもの。

この成分はサイロシビンやサイロシンなどである⁵⁾。これは神経伝達物質であるセロトニンに構造が似て、その生理作用を攪乱するために、幻覚が現れるとされている。

このことは、ポジトロン標識を使って、脳内のトリプタミン誘導体の動きが研究され、幻覚発現の機構が物質レベルで解明されつつある。

ヒカゲシビレタケは横山和正氏により命名された⁵⁾。彼はこれを偶然試食し、幻覚を体験している。このキノコは夏から秋にかけて生え、黄土色から褐色、黒色になり、触れると青変する小型のキノコで、広く日本中に分布している(図6)。

ヒカゲシビレタケの幻覚成分のサイロシビンは、LSD-25やメスカリンなどと同様の幻覚を示すとされている⁵⁾(図7)。

先のメキシコの幻覚キノコは、熱帯性でないシビレタケであることが確かめられ、サイロシビンが分離されている⁶⁾。

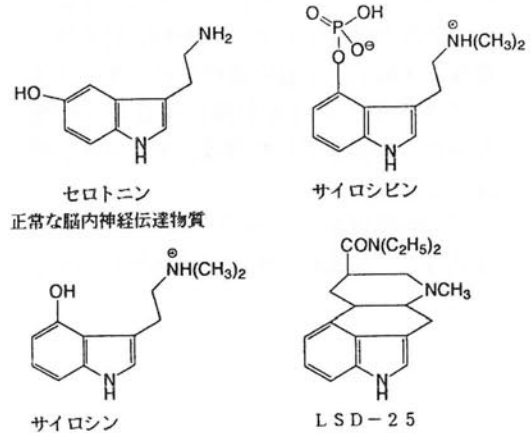


図7 ヒカゲシビレダケ、ワレイダケなど

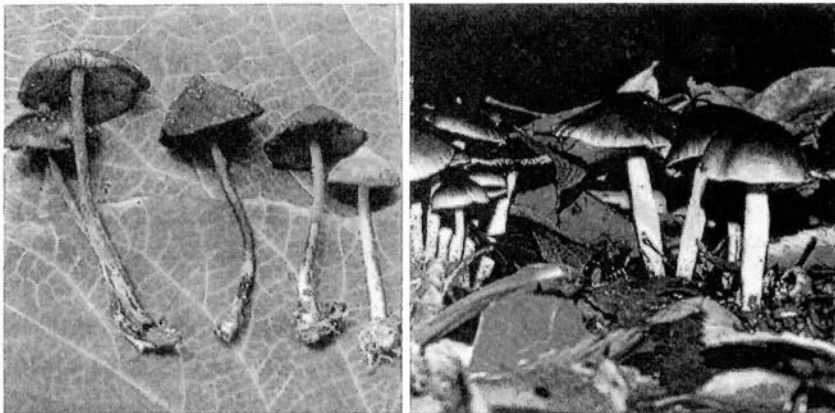


図6 左:ヒカゲシビレタケ 右:シビレタケ

このサイロシピンは日本では「麻薬及び向精神薬を指定する政令」第1条16項に規定された麻薬であり、沖縄の一部、近畿地区で、これら幻覚キノコの乱用が報告されている⁷⁾。

ここで、典型的なキノコ中毒例の報告を引用する⁵⁾。

「85年10月山形県T町でヒカゲシビレタケが天然ナメコ(図8)と誤って採取され、家族4人とその知人1名が中毒した。5人はそれぞれ異なった症状を示し、最も軽いもので、眠気、しびれ、身体浮遊感、強い不安感などを呈した。最も重い例は先の身体症状に加えて、色彩視、幻覚などを起こし、錯乱状態を呈した。最も軽い例では、農家の主婦で、夕食の調理中に、キノコ2-3本とキノコ汁を小皿に味見した程度だった。幻覚を呈した者は、キノコ汁1杯から2杯であった。

この特徴はキノコの量に依存して、身体症状は重くなるが、精神症状は多彩さを示した」



図8 ナメコ

5 まとめ

今昔物語のキノコによる幻覚について考えるために、現在のキノコ中毒から摂取量と症状の関係を見た。これらのキノコはLSDと同様の幻覚作用があることが、実験精神医学的に示されている。ただし、異なっているところは、キノコの摂取量を厳密に知ることができないことである。したがって、今昔物語の尼僧たちが、恍惚として歌い踊りだすキノコ量であったのは、幸いだったろう。

AERA¹⁾に

「体に悪いのはやりません」

というタイトルでLSDを常用している、24歳のサラリーマンの例が出ていた。

幻覚発現薬の実験から³⁾、LSD-25を飲んで道路へ飛び出して、車に轢かれそうになった例が報告されている。それによると

「自動車が自分に向かって走ってきても、危ないとは思わなかった」

というもの。他は、

「自分は不死身になったと信じて、それを証明するために、心臓を刺そうとした例」がある。さらに、LSDを飲むのをやめてから18ヶ月もたってから、LSD体験が再発(flash-backs)した例もある。この場合、大多数はLSDを飲んだときに体験した妄想や幻覚、非現実感、疎外感などを感じる。

22歳の男性の例では

「彼はLSDを飲んだとき、誰かが殺しに来るように感じた。その他の症状は普通だった。2ヶ月後、ガールフレンドと口論している最中に、突然彼女が自分を殺そうとしていると、感じて恐慌をきたした。その後も、数回そんな恐怖感が突然に起こった」

この様に、普通の人(精神異常者のLSD常習ではないという意味)の例が報告されていることから、決して身体に悪くないものではないことを、報道する必要があるのではないだろうか。

[参考文献]

- 1) 烏賀陽弘道, AERA, 11/28 (1994).
- 2) 吉野清一, 原始文化の探究, p206,
吉野清一著作集 4, 三一書房.
- 3) 薬物依存と中毒 I, 現代精神医学体系,
p351, 中山書店.
- 4) 草野源次郎, 遺伝, 39, 32 (1985).
- 5) 武者盛宏, 草野源次郎, 田中文雄, 後
藤裕, 石井厚, 精神神経誌, 90, 313
(1988).
- 6) 実験精神医学, 日本精神医学全書 6,
p287, 金原出版.
- 7) 近畿地区麻薬取締官事務所, 乱用される
茸について.
- 8) マイタケの図: 牧野新日本植物図鑑,
3852 p963 (1964).
- 9) ワライダケの図: 朝日百科, 世界の植
物, 116, p2735 (1978).
ベニテングダケの図: 同上, p2733
(1978).
Psilocybe mexicana の図: 同誌, 107,
p3261 (1978).
ヒカゲシビレタケ, シビレタケの図: 同
誌, 116, p2740, 2739 (1978).
ナメコの図: 牧野新日本植物図鑑,
3872, p968 (1964).